

なんとなく 奥判らない 神社
 立派々々 天にも 蕪る 菊の 風
 開いてる 盃が 飛ぶ 菊の 庭
 昭和維新 明光殿が オーストリチー
 昭和維新 大和は 中和の 平和来
 握つてる 二號が 茶瓶の 金の玉
 色づいて 愧かしさうに 握つてる
 選まれて 彌勒三會の 鐘を 撞き
 幾度 も 呉れ 〳 が来る 秋の夕
 神さまは 世を 幾年の 御用心
 見違へて くれる な世界の 色盲者

苦しい顔して 氣張つてる 不動な

花匂ふ 神苑長閑に 風も無く 朧にかすむ 春の夜の月

和歌冠句巻十三冊 明光社奥の居室に認め終る
 明光殿立出で 風呂の湯に入りて 顔を剃れども 今日 安全
 高天閣和室に入りて 月並の和歌と冠句の選を爲したり
 龍岡に改善新聞支局をば 設立せんと 二人の記者來ぬ

入重野子は尙江伴ひ京都市へ音楽聞かん夕方に行く
 空の色冷たき迄に蒼々と冴え渡りつゝ晝の虫啼く
 観音の傘松が枝も風の波立たなく神苑静に暮れ行く
 歌日記原稿三十四號帳媽と子宗匠に相渡しけり

○作歌 女郎花

枯山の尾上へ匂ふ女郎花花の名だてもやさしかりけり
 打ちなびく花の姿のなよくと尾上にふるふ女郎花かな
 女郎花花の下紐誰がとかむ人松虫の宿の草むら

女郎花花の袂にかくろひて人松虫の啼き渡るかな
 たそがるゝ夕べに匂ふ女郎花惜しやながむる花も一時
 女郎花花にも葉にもたへがたき色香ふくみて月にかゞよふ
 見るからに仇なる花の女郎花誰が手折るらん高山の空
 手折るべきすべも得ならぬ花ぞとも露白玉の匂ふ秋かな
 女郎花咲ける野面をなびかして静心なく秋風の吹く
 女郎花匂ふ夕べの淺茅生の露打ち拂ふ秋の山風
 月さゆる夕べの空に女郎花風のまにくと匂ひこぼるゝ
 秋山の黄金の景色いろめくも咲く女郎花あればなるらん

見るからに仇なる色の女郎花なせ言とはぬ今業平に
秋風にそよぐ尾上の女郎花夕べの空にかこそしるけれ
女郎花霜に萎るゝやき姿暮れゆく秋のあはれとむる
女郎花尾の上の風にしをれふすいたましきが上にこほろぎのなく
吹く風にたふるゝ夕べの女郎花誰を待つらん芝の伏どに
尾上^を吹く風にたふるゝ女郎花露の生命の知らぬがほにて
夕風になびく小山の女郎花月光る夜半の姿さやけし
風吹けばたゞ譯もなく一片になびくもやゝし野の女郎花
秋風に心もとめず折れふして月にかゞよふ女郎花かな

女郎花北風たちでもる伏せにかたむく南の空に月さゆ
秋風のそよぐがまゝに女郎花心もなげにくねるあはれさ
夜嵐の吹きのままにゝ女郎花たゞひと時をくねる山の端
女郎花立てるけしきはものを云ふ花にも増してやさしかりけり
女郎花山の尾上に淋しげに立てるけしきは見る目いぢらし
月になく虫を友とし女郎花妹と背よりもなほむつまじみ立つ
女郎花そのみやびなる名にめでて我も一本手折り見しかな
女郎花尾上を渡る夜嵐にうたれがみふる秋は淋しき
月冴ゆる夕べすがしき女郎花仇に立つ名の消すよしもなき

女郎花の姿の仇なれば虫も来て啼く月光もさゆ
咲きそめて花の香慕ふ虫の音のあなかしましき女郎花かな
山道に仇に匂へる女郎花後めだしてゆく人もがな
女郎花匂ふ姿によそほしき乙女の面のあいしきかな
その細き花の姿のたをわかさ汝をみなへし誰を招くや
ますらをも夕陽に匂ふ女郎花の姿をなつかしく見る
夕暮の雨にしをるゝ女郎花の風情のすてがたきかな
よもすがら雨にうたるゝ女郎花露の涙を拂ふ朝風
朝露になびく尾上の女郎花月の光をすてがてにして

朝露に起き伏す野邊の女郎花手折りてさゝむ我が床の邊に
冴え渡る月を命と女郎花露をおかざる風情清しも
朝霧の露の手枕たしゝに寝ぬるも床し野の女郎花
秋雨にせき出でし露のかわくまも荒野に匂ふ女郎花かな
別れゆく夜半の名残りと女郎花月すむ庭におりて渡しぬ
唯獨りよるもやねなん女郎花窓吹く風を君は顔りに
秋霧に立ちかくるらし女郎花唯花の香のみぞ流るゝ
秋霧に峯がくれゆく女郎花誰も白樺の下に匂へる
汝と吾は野邊のさびしき女郎花秋にのみ逢ふ牽牛織女か

吾が戀は峯の尾上の女郎花秋より外に逢はむすべなし
榮平の君にあらねば女郎花誰が秋風になびくべしやは
我が戀は誰にかたらん夜嵐にもまるゝ尾上の女郎花かも
女郎花誰にたはれてなびくらむ花吹くやさしき風もある世に
女郎花折る袖ぬらす夕暮のねたましげなる秋の雨かな
なよ竹の君の手に似し女郎花折る袖はらふねたみの夕風
小夜ふけて物おもふ袖に女郎花風にこそはれおくる花の香
一人のみたゞひとりのみ野の夕べ立ちて淋しく女郎花見る
女郎花露にしをるゝやさ委人知れずこそ焦れけるかな

女郎花床に活けたる此の夕べ唯かりにのみふしてみしかな
夕風のそよぎにさへも心おく風情やさしき女郎花かな
七草の秋は匂へど女郎花いざおなじくは手折りてや見む
夜嵐にいつしか馴るゝ女郎花吐くはないきのあらくもあるかな
打ちなびく方もさだめず女郎花風に伏しつゝ露に伏しつゝ
秋の夜の月もすみやのおくふかく日ぐらしにみる女郎花かな
淡雪の若やる胸をしめゆふの枕にかをる女郎花かな
我が庭にかをるもゆかし女郎花風の戦そよぎに水かゞみ見る
女郎花生ふる澤邊に松虫の聲さやかなり月のうかべば

女郎花 多かる野邊を吾一人通ふ夕べに啼くや松虫
秋風に色めく野邊の女郎花月も玉露わけてほゝ笑む
虫の聲なまめく野邊を我行けば月の露そふ女郎花かな
女郎花匂へる秋の山道を通ひけるかな人を戀ひつゝ

○

目と目で足りない思ひのたけを 手と手握つて物言はず
拗ねて泣くのも戀路の上手 背中合せの五分間
主は柴垣わたしは糸瓜 はなれが辛さに絡みつく
君と別れて心をあとに 蝦夷ヶ嶋根の萩を見る

四季の花咲く天恩郷に 花と月との姫が住む
朝な夕なに鈴ふる虫の 聲にその君思ひ出す
夫婦喧嘩の所爲とも知らず 笑顔で受けてる焼繼屋
夫婦喧嘩をしたその後で 主の顔見りや氣が済まぬ
テンブラ見たよな男でさへも 夫とおもへば憎くは無い
縮緬雑魚のよな女房でさへも なめりやかんばし色がある
眞鍮のテンブラ見たよだなごと 悪口いふ妻味が良い
縮緬雑魚だと何言はしやんす あなたは棒鱈口斗り
秋の長夜に別れて住めば 虫の聲さへなつかしい



水山の毫揮師聖口出

主は巾着わたしは湯槽 入れる斗りで餘念ない
 虫の聲聞きや珠更懸し 秋の長夜に君の夢
 月と花との明光殿に 露の瞳を照らす君
 虫の鈴ふる明光殿に 月のさゆれば秋が来る
 焼いた松茸獨り食ひ惜しい せめては匂へ君の邊に
 花の都に上つた君の 歸りを松虫啼き明かす
 月の澄む夜に君とし行けば ふりの袂に萩の露
 時は如月梅咲く庭に 露のひとみを照らす月
 松の下蔭君とし行けば 露の命の身も惜しい

櫟林に啼く鈴虫の聲に月さへ聞き惚れる
沖の白石打ち寄す波の深い心を知る人や君
君や來るか松浦崎に立てば波間の月が笑む
君がいたつき聞く此の夕べ芙蓉の月さへ撮き曇る
濱の眞砂と美人はあれど君と三嶋の月が良い
文の便りは月々あれど一夜逢はねば物足らぬ
一人住むとて輕蔑するな後家の軒にも月は照る
さんざ月をばながめておいて秋が來たとは虫が良い
月の照る夜は尾花でさへも露の涙をこぼしける

標林に錦の波をたてゝこぎゆく月の舟
 君は高嶺に綺麗に咲いた花よ手折らんすべもなし
 春の野に咲く薫の花をおぼろまなこで月が見る
 月に吟ずる人松虫の君に音色をきかせ度い
 秋のみ空に照る月かげの清い姿を虫がすく
 秋の夕べに澄む月かげを友とながめて酒をくむ
 君は雲井の上ゆく月よ毎夜こがるゝ濱千鳥
 月の澄む夜に涼みの舟をうけて楽しむ二人づれ
 穴のあく程お前の姿見れど何處にも穴が無い

人の足音近づく聞いて月に讀む文うちさきすてる
 芙蓉の葉にうく露けき月もむすべば飯田と笑ひ顔
 閉月みたよな目玉の鈴を紙函雛につかひたい
 〇〇みたよなへこんだ顔をメシヤの杓子につかひ度い
 ほれた証據にや一口云へばすぐに押したりつねつたり
 川風吹く夜に船のりゆけば月さす水面に皺がよる
 生命かけたる一人の君にます花なきやと氣がもめる
 深夜閉かに人慰ひ居ればそつとのぞいた窓の月
 何はともあれ生命の君にはなれともない一夜さも

秋の鈴虫松虫よりも空にすみきる清い月
 萩や紅葉や白菊よりも空に高澄む月がよい
 月の澄むよのすゞ虫よりもわれ松虫の君がよい
 わしの裏門平助お奈良四十九才の婆も出る
 黒いおもてに白粉つけてちよいと尻ふりやしながよい
 くろうする墨硯の海の深い心を文にかく
 雲に浮氣を駿河の不二も味噌を摺り鉢ふせてゐる

九月十七日

於高天閣

舊十五日

仲秋の月

大空の冷たき迄に澄み渡る明光殿の朝の清しさ
 珍らしく明光殿の宗匠も朝起きしたり何を思てか
 明光殿如月伴ひ立出でて朝の浴槽に垢流しけり
 高知市の高木光枝氏かたの如修行終りて歸國の途につく
 朝晴れの高天閣に清月と虫聞きながら新聞紙讀む
 民政黨森田代議士朝行くと言へど九時半姿を見せず

月光寮漫畫描く間をくり延べて未だ來ぬ友を待つ間長しも
 月並の冠句の四光漸くに還り定めけり高天閣にて
 晝も猶虫の聲々かしましく空澄み風さゆ花明山神苑
 晴れ渡る今宵の月の影見んと思へば樂し龜山高臺
 今日も亦月光寮に出張し漫畫十一下書を爲す

○
 國常立尊

久方の天津空より龍に乗り地に降ります國の祖神

天照大神

久方の天の八重雲押別けて世を照します日の大御神

素盞鳴の神

只獨り千座の置戸を負はせつゝ世を救ひます素盞鳴の神

文珠菩薩

獅子王の背に腰据ゑて染紙をひもどく文珠の智慧ぞかやく

布袋和尚

にこくと笑顔たゝへて太つ腹の袋の中は誠のみなり

福祿壽

福祿壽十二の唐兒引き連れて雲別け天降る月の花明山

壽老人

千年の鶴の齡を保ちつゝ安く世渡る壽老人かな

伊都能賣觀音

木の花の不二の高峰にたつ雲の上踏み別けて伊都能賣の神

普賢菩薩

白象の背に悠然とまたがりて普賢菩薩は世を照すなり

草刈乙女

草を刈るひなの乙女の優姿花の都に見る由もがな

養老孝子

親思ふ心の誠に感じけん瀧水かをりて酒となりけり

○

午前十時頃代議士森田茂、東洋軒主人、上野公園の一行三氏來訪、高天閣にて晝飯を共にし午後一時三十分發汽車にて歸京せり。其際かねて心に懸け居たる寸志として桃の實五箇を森田氏に送りたり。夫れより月光寮に董月に送られる出張、聖展用畫圖を描き、完成せし三幅のみ持ち歸る事と爲したり。牧野氏の手紙を持ちて本莊氏來訪あり、又もや三萬圓也の用金申込ありたれども斷然之

を拒絶したり。

○作歌 月の部

秋の夜の月清みつゝ、鈴虫の聲ふりはえて草むらになく
 大空の月静かなるこの夕べ花の袖吹くそよ風もなし
 山の家の月もる庭によもすがら人まつ虫の啼き渡るなり
 月夜よし花に亦よし雪によし神の鎮まる天恩の郷
 秋雨のくまなく霽れて襟生の梢の露に月宿るなり
 大空の月もて遊ぶ黒雲の呑みつ吐きつゝ小夜更け渡る

賤の家の月もる軒をとこしへの伏床となしてきりくすなく
 時雨雲波立つ空の海原を漕ぎて西行く月人男哉
 女郎花匂へる秋の夕暮は月讀男こそ主なるらむ
 照る月のかげにかくれてその昔逢ひにし君を偲ぶ夜半哉
 神苑に月のかげしく夕暮はさやかなりけり月の石宮
 女郎花花にそふ露照らしつゝ月のかつら男さゆる夜半哉
 仲秋の月の盛の神苑は虫の音清し萩の香高し
 望の夜の月の光りは天地の神の靈の現れなるらむ
 神苑に月のにほひて紫の萩の梢にしづるゝ玉露

吾が戀ふる君はも月の心哉滿つるともよしかくるともよし
夜もすがら御空の月のいろ冴えて紫かをる神苑の萩
仲秋の月の中なる今宵はも君と遊ばん歌や詠まなん
目を追うてうつらふ月の姿こそ人の住む世の証明なるかも
空をゆく雲の帳さばりを押し分けて匂へる秋の月の面かな
雪霜の冷ゆる上にも夜を護る月の思ひを知る人ぞなき
打仰ぐ月のおもはの清ければ明日の夕べは風や立つらむ
仲秋の月の面かけ慕ひつゝ池の邊に啼く松虫のこゑ
中空の月の夜頃は楽しけれ二人ゆく夜のあたり静けく

神苑の月の夜な〜太りゆくかげをし見れば心たらひぬ
月のゆく道芝分けてかりがねの棹の一すぢ西渡るなり
大空に澄みてかゝれる秋月のあたりに清く一つ星映ゆ
むらきもの心なやます夕暮は盲めしひ目の母持つ月の秋哉
春の夜の月の主は花匂ふ嵐の山の姿なるらむ
おぼろ夜の月の外ゆく川舟に闇も嵐の山櫻散る
世を照らす天恩郷の神苑は月の都となりにけるかな
秋の夜を松虫鈴虫冴ゆる庭にたちて歌詠む月の宮人
さやけさに庭に歌筆持出でて今宵は月の友となりけり

仲秋の月の下草ふりはえて 鈴虫唄ふ 神苑の庭
月のかす今日も重ねて 菅簾いやさやしきて 眺めける哉
夜寒み月の氷のとけやらぬ君の心を如何にとやせむ
夜寒み不二の神山に照る月の雪ならなくに 君戀ひ渡る
澄む月の霜に宿かる 眞夜中に君戀ふ窓邊たゞく木枯
千五百秋八重の雲波かき分けて 西渡りゆく月の舟かな
冴え渡る夕べの海をかき分けて 波にかゞやふ月の舟哉
秋の夜の御空に清く澄む月をかこちける 哉戀の關路に
照る月のかげさやかにて 庭にはふみゝすの首環かゞやき渡る

秋の夜の空ゆく月にさそはれて 吾が魂はフランスに飛ぶ
天づたふ月の桂の露あびて 野邊に匂へる 女郎花かな
皎々と天照る月の下かげに 君待つ夕べ虫の音しげし
浪の穂をくまなく照らして 大由良のと渡る月のさやかなるかな
立冬の夜渡る月のひえくと 雪に輝く 龜山高台
堀の面に浮べる月をくだきつゝ 羽ばたき高し水鳥の群
大空に眞澄の月の照る夜半は 吾が戀心晴れやらぬかな
冴え渡る雲井の月の高ければ かつらをの露ひるよしもなし
半國の峯越す月の惜しまれて 吾おぼしまにかげを見送る

咲き匂ふ萩の葉分けの月さえて人まつ虫のひたなきになく
百千々の虫あこがれて唄ふなり露の玉照るよもぎ生の月に

○明光殿石庭に月見して詠める

菅 疊 いやさや敷きて堅庭に月待つ夕べ聲ふる鈴虫
虫の音は月に冴えつゝ藪蔭に腹鼓打つ豆狸かな
彌勒塔高く照らしてさし登る今宵の月のさやかなるかな
宵の間は明光殿に隔てられ見る山も無き月の面かな
待兼し今宵の空に薄雲の立ち籠むるこそ恨みなりけり
雲の幕破りて覗く月かげの一人清く仰がるゝかな

人妻も俱に交り月を見る宵まつ虫の音もさやかなり
一年に一度よりなき仲秋の月見る庭に君なきぞ憂し
案上に七草生けて待つ月を露白雲は空にふさがる
月の宮の寶座うつして大空に輝く玉兔のかげ高きかな
この夕べ月をまつ虫聲さえて酒の庭に空更け渡る
宴席の葡萄の房の粒の數しるけき迄に月さえわたる
淋しさは白粉塗りし顔の生地び見ゆるまで月の照る宵
澁紙のやうな面さへ照る月の光に映えて美はしきかな
神苑に月の天女がまだ居してあられなきかも關東賣を食ふ

月見してゆで豆食へば忽ちに圓き穴より平和の風吹く
尾イ助もお奈良も今宵の月見して豆しやぶるなり芋かぶるなり
天高く月澄み渡るこの夕べ美人の前に高き歌よむ
何時の目かたしに覺えず月の澄む夕べの野路に君と語りし
高き歌よめば澄月手を打つて龜岡燒をする夕べかな
能樂のお面のやうな顔なぞとそりや何吐かす土堤南瓜面
蚊か蜂か猫か猿かは知らねども怒れば直に搔きに来るなり
益良女が酒の徳利を手にかざし戦ひいどむ月見の宴かな
満月は空に照れども月女史雲の階段降りて隠くる

澄む月のおもてに一筆墨つけて五位鶯一羽空に消えたり
天女等の酒宴嫉むか五位鶯の一聲ぞめきて空に流るゝ
織さんのやうな美人が満月の光を背なに負ひてすわれり
平々と小萩の花は蝶の如松吹く風にこぼるる背かな
南瓜面瓢箪面は瓶提げて望の月夜に糸瓜の水取る
太い奴ぶらく下る糸瓜棚に南瓜が摺鉢受けて水探る
そよくと月見る庭に風立ちて花明山神苑小夜更け渡る
月の夜は公孫樹の梢黒々と深くなり行く龜山高台
高台に神籬木と立つ公孫樹の枝に月の鏡を懸けて見しかな

大幣の如くに立てる公孫樹の木は風のまに／＼塵吹き拂ふ
科戸邊の風吹き拂ふ神苑に大幣の如立つ公孫樹かな

名月懸松樹倍清 虫聲涌龜山神苑

天人拍手響蒼空 秋夜爲清飲淨食

萩花亂庭虫吟高 石壁直下酒將酬

明光女天金鈴聲 望月皎々照神苑

蒼空清懸仲秋月 靈男天女集萩庭

舞踊音曲賑宴席 明光殿上玉露輝

○

花の乙女にとりかこまれて 虫を聞く夜に月が照る

月を浮かべて呑む盃に 照るや慰しい禿頭

美人斗りか媽と子連れて 冴えた今宵の月見酒

光秀[○]城趾^しに月[○]見る夕べ 昔偲ばすくつわ虫

風も清しい月見る夕べ 虫の聲 菊[○]萩の下

主は花[○]明山みその[○]月に 酔ふかと思へば氣がもめる

萩はひらく松吹く風に こぼれて益々冴ゆる月

あいそ月照る夕べの庭に よく見りやお前はお龜さん

眺め吉野[○]の花咲く春も 月の秋には及ばない

萩の梢を照らして昇る 今宵の明月色がよい
 神の玉璽字知丸々と 照して輝く月のかけ
 芙蓉の神山輝く月を にくや雲めが吞吐する
 芙蓉の葉末に置く玉露を 照して静かな池の月
 惚れ田中でも此の月光に 二人行くのは愧しい
 雲井の上行く此月光に こがれて泣いてる濱千鳥
 君の文よむ頭の上で 月がにこ〜笑ってる
 今宵の満月鏡となれば すきの土産にして見たい
 四つの眼が秘密をかたる 人の目耳うるさくに

花明山高台月照る夜半に 君をまつ虫啼き明す
 秋は高機如月の莊に 君と三島の月冴ゆる
 秋の御空に澄む月光も しわが見えます水の面
 顔に白粉べつたりつけて 昔の辨天月見する
 化粧水をば探るこの夕べ 瓶もへちまも入るものか
 見れば見る程やさしい姿 月の露もつ花菫
 月の宮居に澄む月光を 獨逸の空まで照らしたい
 獨逸こいつのようしやもなしに 澄むはみ空の月の光
 虫の吟する清しい夕べ 月を枕に寝て見たい

共。に。み。た。御。田。村。雲。別。け。て。昇。る。今。宵。の。望。の。月。
 家。内。揃。う。て。月。見。る。夕。べ。萩。の。む。ら。崎。露。か。を。る。
 高。く。麗。し。今。宵。の。月。は。酒。の。む。し。ろ。の。主。役。
 清。い。姿。に。今。宵。の。月。も。は。ぢ。て。雲。間。に。顔。か。く。す。
 主。に。さ。ゝ。せ。る。竿。こ。そ。な。け。れ。流。れ。涼。し。き。舟。の。月。
 松。の。林。に。さ。す。月。光。も。今。宵。は。銀。杏。の。下。に。照。る。
 月。に。吟。す。る。虫。の。音。聞。け。ば。思。ひ。出。し。ま。す。あ。の。お。方。
 清。い。月。光。ね。た。む。か。虫。が。草。の。枕。で。ぞ。め。い。て。る。
 月。照。る。林。に。人。目。を。さ。け。て。虫。す。く。お。方。と。語。り。合。ふ。

どうなりと業平の君なされませ虫にも戀のある夜ならずや
 花のまくらに春風吹かせ 空にしられぬ月を見る
 君は月光わたしは秋の 虫がすくので啼き明す

◇九月十七日 大阪朝日新聞所載記事

控訴棄却て

大本教側勝つ

大本教主出口すみ女を相手取る訴訟——京都市下京區本町正面下る山本技
 次郎が教主の代理人大國以都雄と契約し教主の住む光照殿と大道場の建具一
 切をこしらへたが、大本教の方では四方繁吉なる者に請負はせ代金はすでに

支拂ひすみとて代金六千九百九十圓を支拂はぬところから、建具代請求の訴へを起した事件は一審で敗けた原告から控訴したが、十七日大阪控訴院で控訴棄却の缺席判決があり、また大本數側の勝訴となつた。

大本に何時も刃向ふ舊檢辯護士もろくも一敗地にまみれけり
神だとして二重拂ひは出来ぬなり故に是非なく抗爭せしかな

九月十八日

於 明 光 殿

舊 十六夜の月

朝未明起き出で空を眺むれば有明の月霧に見えずも
小夜更くるまで月見せし疲勞にや今朝は眠氣も強く迫り來
大空に鱗の雲のふさぎつ、朝日の影は鈍くもさせり
長春に旅立つ雛子氏見送りて舟月京都の驛まで同車す
まだ花を知らぬ庭邊のコスモスの亂れ倒る、狀ぞ情なき
高天閣歸りて見れば新任の挨拶かたぐい官人來れり

大空の魚鱗の白雲來往し風暖かに神苑に萩咲く
寄宿舎の設計圖持ちて大國氏宇知鷹伴ひ入り來りけり
今日一日歌句も選ばず書も描かず疲れたるまゝ月の歌詠む
宮城野の萩の下露七轉ぶ鈴虫に増す百轉ぶ苑
鈴虫の名所は數多ありながら天恩郷に勝るものなし
今宵亦菅疊敷きて十六夜の神苑の月を見んぞ思ふ
月の宮入陽に映えて石瓦薄青く赤く見ゆる夕暮
明光殿今宵も月にあこがれて一夜の夢を結ばんぞ思ふ

支那道院宣傳使神戸へ廿人渡り來ると通信ありたり
鳳聲氏彫刻代二千五百圓に禮金三百圓を添へて送りぬ
松茸を携へ魚屋のお辨さん久方ぶりに吾を訪ひ行く
中空に影かたむかぬ望月の下行く道の明らかなるかな
十六夜の月一文字に横切りて雲たなびきつ空薄がすむ
銀鈴を振る鈴虫の聲さえて月の御庭に百轉びせり
十六夜の月曇ることも惜しからじ望の夜の月飽くまで見し眼は
曇らずば今宵を月に遊ばんぞ思ひし事も夢となりけり

文机の蔭にまだ蚊の潜み居てわが膝の邊をちくちくと刺す
昨夜切りし糸瓜の蔓に透きこほる如き清水の瓶に溜れり

○作歌月の部 前日のつゞき

幾年か月に語りて老いぬれど今宵の月も吾に答へず
秋の夜の時雨るゝ空に月の影時しら雲の上にかゞよふ
何時もみし月かげながら萩にほふ神苑の空は殊に清しき
池の面の波間に宿る月見れば我が身の秋の慰さまるかな
世を捨て、深山の庵にすみ染の衣にも匂ふ秋の夜の月

駒並べて荒野の月に鞭うちし我蒙古路の月を見しかな
吾妹の花のかざしにおくつゆを見惚るゝ如く月のかげうく
大空を隈なく照らす月かげは昔ながらの光なるらむ
大空の雲心地よく吹きはらひ松ヶ枝の月にたわつ夕風
空渡るかりがねの棹見ゆるまで光さやけき望の夜の月
甲子の夏の夜蒙古に我ありて銀鞍照らす月を見しかな
月さゆる夕べの庭にすがたゝみしきてまでごも君は来まさず
夕風の吹きぬきに 〇 打ちなびく峰の尾花のすなほなるかな

一人寝る夜の蚊帳の中に そつとさしこむ窓の月

○

たづね來し人と語らふ眞夜中にのぞくも涼し窓の月かけ
露おきししのゝ萩原わけ行けばぬるゝも清し袖の月かけ
樂しきは昔逢ひにし戀人とかたる夕べの故郷の月
故郷の藁屋の軒もる月かけも昔しのべばなつかしきかな
仲秋の光さやけき月かけにかくれて戀をうたふ松虫
神苑の萩生に匂ふ月かけを仰げば君の 佛の うく
松虫の庭にとびゆく姿さへいとあきらかにさゆる月かけ

盈ち虧けのある月かけを仰ぎ見て秋をさみしみさらえ男の泣く
秋の野に咲く七草に露おきて夜な／＼みまもる月のかつら男
小夜ふけてきりたつ秋の大空にさやけき月のかげ白むなり
うごきなき石の宮居の清庭に月かけ清くさえ渡るかな
月のかげふくる夕べを惜しみてか尾花が露に松虫のなく
秋の夜の月かげたくる神苑に誰が祈るらん拍手の音
望月のかげさやかなる池の面に白々とうく鷺鳥の群かな
風そよぐ尾花が上に望月のかげなびく夜は清しかりけり
夕月のほのめく影に風たちて秋の尾上に招く穂すゝき

西になるかげさやかなる月の夜にたてば東の君の戀しき
神路山空ゆくかげを見送りて月のみそのに鈴虫のなく
月のかげくまなきまでにしゆる秋の獨居淋しかな／＼のなく
白雲も晴れてくまなき峯の上に冴え渡るかな三日の月光
大空に雲も残さず冴え渡る月の御舟のさやかなるかな
月の面にくま見え初めて間もあらず雨雲秋の御空包めり
曇りなき御空の月を鏡とし神の賜ひしみたま磨かん
夕風にちりも曇らぬ月光を仰ぐも清し秋の神苑
月見れば涙に曇る秋の暮遠きにいます君を偲びて

秋の夜のひるにもまがふ月光は神の御苑の光なりけり
秋の夜のはつかに出づる月光は別れて歸る野路を照らせり
大空を行くとも見えぬ仲秋の月は二人の上に輝く
天の原かたむく月に小夜ふけて別る、袖に涙の露てる
仲秋の秋の御空をくまもなく照らして渡る月よみの舟
小夜ふけてひとり空ゆく月光の露ふみ分けて二人野路ゆく
初秋の空くまもなく照らしつゝ西行く月の舟の涼しさ
十二夜の月入りがたの空かすみ聲のみぞ聞く漆の五位鶯
秋風にはるゝ夕べの月光は君と逢ふ夜のたよりなりけり

秋の夜の雲間をもるゝ月光に風さむみつゝ虫なき渡る
夏の夜の雲静かなる大空をあらへる如き月流れ行く
一片の雲なき峯の尾昇^{のぼ}ります月の鏡のあでやかなるかな
仲秋の空にわきたつ雲のみを心にかくる月待ちの宵
村雲の絶間すかして照る月は吾ゆく山路の光なりけり
秋ふかみ夕露匂ふ神苑の草葉にかけを宿す月光
清苑の小萩の露に宿る月をとれよとせがむ背のうなるる
庭に置く露のよすがを照らしつゝかたぶくまでの月を見しかな
庭萩^{はぎ}の露にてりそふ月光はまたなき秋の眺めなりけり

秋の夜の野原の露に宿かりて輝く月のかげ低きかな
夕さりて鐘の音さゆる山寺の棟にかゞやく月の露かな
望の夜の月あこがるゝ秋の庭の虫の音清し萩の下かけ
大和田の波にかゞよふ月光は山のみ知らぬ眺めなりけり
東の山の端出づる月光を居乍らに見る明光殿哉
夕暮のたゞすの森の木の間よりもる月光を二人ひそみる
小雲川水底までもてり渡る月こそ水の鏡なるらん
汝が君と二人板井の清水波む玉手の露に宿る月光
小夜ふけてあさぢが上におく月の露ふき拂ふにくや秋風

秋の夜の千草を照らす望月の光かほしたくくにきりくくすなく
しげりあふ竹の葉分の夜嵐にふるへる如し空の月光
風はなき虫の音さゆる山家路の竹の葉ごもりに月光のさす
神苑の松の木の間をもる月のかげひそくくとさくやく人あり
病める身のあはれなる哉望月を聞の内より窓の光かほ見る
吾が聞の内までのぞく秋の夜の月冴ゆるとも一人は淋しき
大空にさゆる月光惜しまれて窓もさくれず一人寝し哉
風の窓明くるも望の月光を清く居乍ら見んが爲なり
秋の夜の清しきまくに草に伏せば枕の下にも月の露てる

いくめぐり眺むる秋の月光は見る日あかざり君のおもさし
望の夜の月はくもれる世の人の心をさますかゞみなるらん
秋の日の哀れ身にしむ夕空になぐさめ顔なる月の光哉
吾が背子の來たるおそしと佇めば峯の尾照らして月は昇れり
ますらめの吟聲清くひゞきつゝ明光殿に月は輝く
やがて今満つると思へど待月のかげも清しくあこがれて見し
黄昏たふしの間も深けき神苑にまたるゝ月の昇る清しき
十四夜じゅうしよの月待つほどの間を惜しみ君と神苑をさまよひ見しかな
まだ月の出で來ぬ庭にぼんぼりをともして待つや歌人の群

山の端ゆ出で、も月ぞまろからぬかげをしみればもの足らぬかな
小庭べに小むしろしきて友と待てば出で来る月のおそき十四夜
たそがれて山の端おそく出る月のかげまろわびて啼く虫のこゑ
月おそき君と夕べに静行けばあらゝぎの露に裾のぬれつゝ
待つ人の爲にやあらむ大空に月の昇りのおそきこの宵
たまさかに待つことにてもあらぬ夜を月はみ空にまろくなり行く
君來むとまつに久しき森かげを照らして昇る十六夜の月
あて人を待つ夜はいとゞ長くあれ月の昇ればせんすべもなし
神苑の松に更けゆく月かげを惜しみて啼くか鈴虫の聲

あかしがた松に更けぬる月かげの波る上に鳴く千鳥かな
待ちわぶる月は峯の尾昇りけりいざや歌はん庭のむしろに
その君を待ちつゝをるに夜は深みこゝろなき月昇り初めたり
月の出をまたるゝ空にかりがねの聲を落して高渡りゆく
歌人にまたれておそき月のかげ昇る夕べの萩はこぼるゝ
白雲の空ゆく浪の下に待つ月の光りの深くもあるかな
人知れず心のうちに待つ月をにくや黒雲かくす夕暮
築山に出でぬる間の清しさを吾あこがれて仰ぎ見しかな
十四夜の月出でがてにするすみの薫り床しき歌人の面

待つ月のまだ出でやらぬ夕闇に入まつ虫のこゑさやかなり
乙女子の玉手のすみは匂ふなりはやかかけみせよ十四夜の月
月の面よこぎる雲の一すぢに君おもふ夜は虫の音悲しき
山のみ空をのこして十四夜の月を包める白雲の暮
仰ぎみる山のあなたに月冴えて吾が高殿にさすかげふかし
月は今そなたの峯の尾かけさして夜半吹く風の冷えん身にしむ
月かげは愛宕の峯に向ふなりいざや休まむ夜更のふしどに
秋の日の暮るゝうれしき山の家に月は昇れり虫はうたへり
十四夜の月半國の山の尾にかたむく見れば夜はふけにけり

心あてに山路をゆけば十四夜の月は谷間に昇り初めたり
たまさかに遠くたづねて來し友に心をつくす宵待の月
國の爲心つくしの益良夫も酒くみ交す十四夜の月
なぐさまぬ心の闇を照らしつゝひとり寝る夜の枕に月さす
小夜更けて君思ひやる心をも露しら雲の月をさへぎる
夕月の西空低うかくろひて算木山さんびやま電燈尾の上にさやけし
吾が背子の來ぬ間も待たず闇を地におとしてかくるゝ夕月夜かな
神ぞのゝあちこち闇を落しつゝかすかに照れる三日月のかけ
三日月のわれて入りける山の端にたなびき渡る夕雲の糸に

秋立ちてまだ三日月の見えぬ竹神苑あかしてひぐらしの啼く
月たちてまだ三日月のかけ見えぬ山のふもとの家居淋しき
たそがれて間もなく二日の月かけは西山の端にかくれけるかな
亡き妻を思ひて息づく夕暮の片割月のかけぞ淋しき
武士の馬に鞍おく夕まぐれあぶみを照らす弓はりの月
われて出るみ空の月を打ち眺めはらめる妻の身を思ふかな
三日月のかけほのかなる花明山の夕べにたてば何か樂しき
三日月のかくれし山の尾上近く光ほのめく淺き夜の空
久方の雲にかけすむ新月の光かそけく神苑照らせれり

たそがれて西に見そむる新月のかけにも似たる君なりしかな
西にまつ日を追はむとや新月はいとせはしげに山にかくれし
山うらにほのめき渡る光こそ二日の月のかげにやあらむ
月は今西に入るさの波の上に舟脚早く白帆ほのめく
ものゝふの弓射る方の空清く照らして月は海に沈めり
新月の入りがた近き淺ぢふに君まち居れば聞おそひ来る
花を見つ虫を聞きつゝあかである空弓はりの月かゞやけり
秋の日の夕べの空の主としたはるゝかな新月のかけ
夕暮の空を照らして弓はりの月山の端に沈みけるかな

暮れぬ間の眺めともみむ新月の矢の如沈む山下の家
宵の間はひとり吾が世と思ふかな弓はり月のかげのありせば
新月の光を見むとや子供等はわら家の軒に暮るゝ待つなり
天恩郷花の乙女の面ざしによくも似しかな新月の眉
新月のかげにあこがれ乙女子は鏡の前に眉根かき居り
山の端にかやく三日の月光を君とおもへばはかなき夕暮
山高み花の上野の吾が家はかつく三日の月を見るかな
月の弓はつてかけたり胸勇む春の夕べの櫻の下に
花さそふ月とは更にしらま弓矢さへたてさへきかぬ君はも

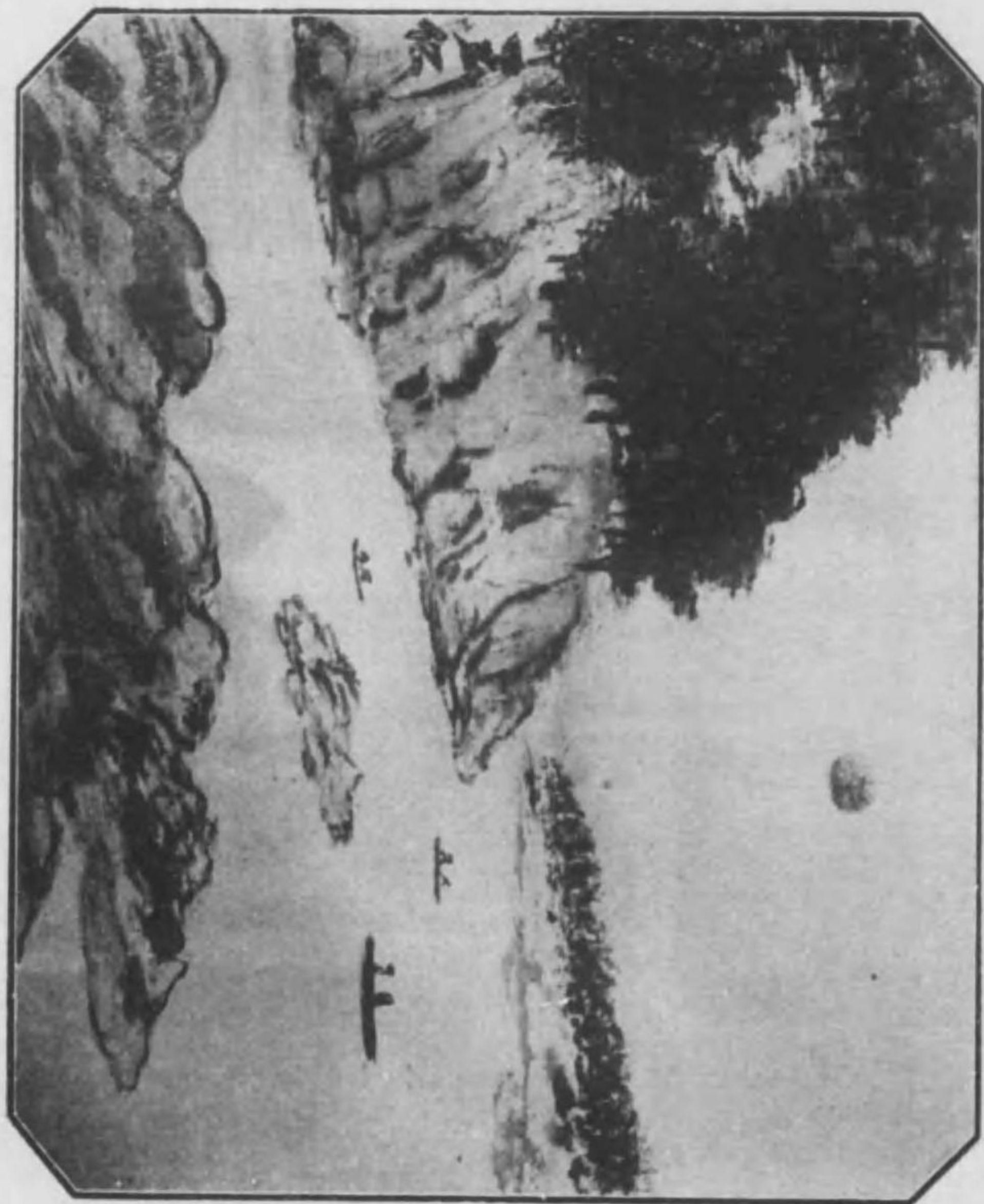
おぼつかなき三日の月かけ見たりけり吾故郷の山の家に寝て
庭にはふ蟻のかげさへ見ゆる迄輝き渡る月ざかりかな
櫻生の梢の露に匂ひつゝ月はうまらに冴え渡りけり
月ざかりたゆたふかげもあらなくに秋の神苑みさのの明かなる哉
秋の夜の中天高き月かけに山の尾上はいや澄み渡れり
吾が住める神苑みさののみかは月ざかり四方の中空かき光澄み渡る
雲の上のあで人の如月ざかり昇る空なき天心に澄む
中天に昇りはてたる月かけは動かざりけり庭木の影も
いづ方へ行くとも見えぬ天心にすみきる月のさやかなる哉

山の端に入るほどもまだはるかなる中天にさゆる月ざかり哉
小夜更けて月のかつら男訝え乍ら出で入る山の中宿りせり
秋もまだ半ばにすぎぬ大空をくまなく照らす望の夜の月
天心に月のかつら男澄み切りて動かぬ光の雄々しきろかも

◇九月十八日 關西日々新聞所載記事

大本教 奈良へ進出

京都府下綾部町に本部を置く大本教の出口王仁三郎氏は今回大阪の某有力
實業家と謀議した末、奈良縣下の某地に於て大本教の別院を建設し、以て天
理教の地盤に喰ひ入り、新しき信者の獲得に努めるべく、目下その準備を



山口聖師探窓の山水

進めてゐると傳へられて居る。

◇九月十八日 北國夕刊新聞所載記事

土井大靖述

政治國難、經濟國難、思想國難の聲浪に喧傳され、爾來世の指導的地位にあるものにして、思想善導をいはざるものはない。而かも此三國難は何れも益々深刻を加へ來りつゝありて、世相彌々險惡暗澹を極め、其歸趨や眞に憂ふべきものがある。洵に建國以來の大國難である。今や當局者は教化總動員を行ひ、總ゆる教化団体は起ちて是に應じて戮力、此國難を排せんとして居る。時宜を得たりといふべき乎、時機既におそしといふべき乎、更に又是等教化団体がよく今日の時勢に於て人心教化の實力を有し、此危機より國家

國民を救済し得べきものなりや否や。吾等はこゝに疑ひなきを得ざること
甚だ遺憾とするものである。

凡そ國家、社會を救はんとすれば、國家、社會の構成分子たる各個人を救
はざる可からず。各個人を眞に救はんとすれば其靈性より之を救はざる可
からず。靈性にして味く、救はれずんば千百の制物燦然たるも以て人類文化の
社會とはいふべからざるものである。而して普く人類を此靈性より根本的に
救ひ得るものは本來宗教でなければならぬ。

人類を確實に根本的に濟ひ得る完全にして偉大なる、活力ある宗教には思
ふに三個の要素を具備しなければならぬ。第一に絶對者即ち神の存在を明に
するものなること。第二に人間は何處より來り、何處に向つて去らんとする
や、來る所、去る所を明にし、人間として生を此天地の間に享くる所以、學

竟人世の意義目的を明にするものなること。第三に宇宙の大法を聞き、惟神
の大道を明にするものなること即ち是である。此三者の何れを缺くもそは甚
しく宗教の完全性を缺ぐものといふべきである。

現今の宗教を見るに此の三者中一と雖も眞に之を完全に所有し、發揮しつ
ゝあるものがあるであらうか。或ものは神佛の存在を説くも只傳統的に信じ
つゝありといふに過ぎずして、是が存在を明にするの力を有せず、或ものは
臆面もなく無神論を唱へつゝあり。又或ものは天國地獄を述べ、死後生命の
存続することをいふも、其實之を明瞭にせず、或は全く之を否認せるものも
あり。又或ものは徒に戒律的教義を以て人心を縛し、其説く所倫理道德の範
疇を多く出でざるものあり、或は科學に迎合し、或は分列の小智を以て經典
を破り、或は高遠に法を説くものあるも、單なる哲理論に墮して人間の心性

に何等即するものがない。只寧ろやゝもすれば「末法闘争」の狀を現じつゝありて、他を教化するよりも先づ自らを救極することを要するの有様である。觀來れば末世の教法大概斯の如くである。既に宗教に人心を濟ふの權能がなく、人心従つて濁亂して底止する所を知らざらんとするも實に當然にして必然の勢である。

此時に當りて天、大悲を垂れて救世の神人を降す。大本の出現がこゝに於てか存する。神の存在を明示し、人間死後の世界即ち靈界の消息を詳述し、大道大法を闡顯し、人類に光と熱、智慧と愛とを與ふるものは大本である。世界統一神國建設の大宣言が發せられて、之を如實に確信し、呼號し、實行運動に精進しつゝあるものは大本である。

大本の教は天啓神示其ものである。大本の説く所は悉く體驗實證に基くも

のである。無神論者も來れ、唯物論者も來れ、悩めるもの、昧きもの、左傾も右傾も皆來れ、來つて纒に之を聽かば直ちに釋然として了するものがあるであらう。斯くて永劫の生命を見出し、新に人生の眞面目を打開し、中道自ら立ち、眞に限りなき光明と慈熱と歡喜との世界に參入するであらう。

神を知らずしては建國の大本を知るべからず。建國の大本を知らずして國体を説くも竟に空し。寔に國體觀念の明徴を期さんとすれば乞ふ先づ大本に來れ。浮華の風を去りて、經濟生活改善の實を擧ぐるが如きは眞に一旦夕の事に屬する。

大本は大正十年以來久しく法難道苦の裡にあつた。此間隱忍離伏し來つたのであるが、而かも大正十年に百二十に過ぎざりし支部が今や八百餘を數へ過去四年間に於て歐洲にありては佛、獨、伊、瑞、西、勃、チエツコスロバ

キヤの七ヶ國に支部を存し、南北兩米に、南洋に、ペルシャに支那に又支脈を有し、人類救済の世界的經綸は日に月に進展しつゝある。

北陸は未だ大本の開拓の頗る淺少の地である。不肖不敏の身を以て此度是が開拓の爲め特に派遣せられて居る金澤市に定められた。

幸に憂國愛世の士は宗教宗派等に拘らず、就いて大本を正し、吾等が活動を援助せられて、此世界統一神國建設の大機に當つて與に地上に光明世界の樹立に努力せられんことを深く念願するものである、茲に北陸の人士諸賢に御挨拶の心持を兼ねて一言進言するものである。

（以下は、このページの下部に横書きで記述された、上記の文章の補足や関連する文章と思われるが、文字が非常に小さく、正確な読み取りが困難である。）

九月十九日 於光明殿

朝明けの空晴れ々々東の山の尾の上に太陽昇れり
虫の聲神苑隈なく牙え渡り明光殿のあした賑はし
木犀の花吾庭に匂ひつゝ、松茸山の秋は來にけり
明光殿鳴く村雀聲も無く虫の音斗り賑はしき朝
朝霧に有明月の影白み草の葉末の露に虫啼く
ふき出しのたばこも今日は鼻つまりむせかへりつゝ、目に涙うく

今日も亦色紙短冊數百枚景品用と誌し終へたり
 洗心亭浴槽にひたり久し振りに布海苔を以ちて頭髮洗ひぬ
 澄月と吟月二人吾髪を力盡して揃へけるかな
 高臺の公孫樹の蔭に小筵をしきて頭髮風にかわかず
 秋風に髪干しながら月の歌三十八首詠みてけるかな
 仙臺の村松夫人下阪の途天恩郷に吾訪ひて行く
 宵闇の庭に松虫鈴虫の聲さえ渡りて暑き今日かな
 萩の香の闇にこぼるか風のまに吾居間までも匂ひ來れり

○作歌月の部(つゞき)

待ち侘びし心のまゝに澄める夜の月に酒汲む神苑の庭
 照りはえて残る隈なき大空を渡らふ月のかげぞ涼しき
 望の夜の御空に高く澄む月は晝に髪らぬまでに照り添ふ
 仲秋の月も御空にかたむきて夜は更けぬらし薄霧立ち舞ふ
 小夜中に窓を開けば天心に落付き顔なる望の夜の月
 神苑の松ヶ枝照らして月今宵吾たゞすみて虫のとぶ見る
 白露のたれる面わの月冴えて地上くまなく冴ゆる望の夜
 石山の名に負ふ月のかげ冴えて琵琶の湖風すみわたる

望月の名にし負ふ影いや冴えて月の宮居に露の玉てる
ゆく秋のもなかの月のさやければ虫うたふ庭に音もうたはむ
稻實るもなかの秋を照らしつゝ空にすみきる月ざかりかな
ゆく秋のもなかの空をしめながらあるじ顔なる望の夜の月
天地も冴えてすがしきよそほひは秋のもなかの月かげなりけり
十六夜のちのよの月見る庭に虫さえて秋のなかばもすぎさりにけり
仲秋なかあきの今宵の月の惜しまるゝにくやみ空を包む小夜納
どの月も望の夕べは清けれどわきて今宵の月はさやけし
月今宵みちたる空に雁の棹流るゝ見えて虫の音清し

望の夜は数ある中に仲秋に今宵の名をや誰たがつけにけん
天地をくまなく照らす月今宵長きむしろにあかず酒くむ
望の夜の月はのぼれり仲秋の今宵に似たるかげをなげつゝ
年のうちに一夜となきは仲秋の月みつ夕べの權威なりけり
くらがりの世にたてるなる司人も月の光りを仰がぬはなし
月清く照りみつ光にあこがれて門に立つ間の心すがしも
まどかなる今宵の月に思ふかなわが魂もかくあれかしと
山の端に出でいる月のさやけさは花も紅葉も及ばざりけり
くもりなき空ゆく月の下かけに君としゆけば面はゆるかな

しのび男のゆく所なきまでに冴ゆる今宵の月の情なきかな
月見んと野路を辿れば珍らしく思ひの君に逢ひにけるかな
十六夜の夕べにたてば神苑に月まつ虫の聲さえわたる
夕ぐれのいざよふ間さへ待ちわびて庭に雪洞とぼす歌人
月かげのいざよふ程の間を惜しみ電燈のもとに歌筆はしらす
山の端にいざよふかげのほの見えて虫なく庭にさむしるを敷く
大空にいざよふ雲のあさくして月かげ清く神苑のぞけり
わだの原いざよふ波の上わたる舟のいさり火淡くもあるかな
大空に心いざよふこの夕べきみ松ヶ枝に露の玉照る

山の端にしばしいいざよふ月かげをたよりになくか野邊のすゝ虫
月のかげしばし待たるゝいざよひに心みちかき我は寝ねたり
いざよひの冴えたる月の面見ればきのふの光に劣らざりけり
月のいろきのふの名残りか白雲をわけてかゞやく空のさやけさ
立待ちの月のおもてをながめつゝかけ始めたり戀の手綱を
さしのぼる月待つとははあらねども今宵あはんと木蔭に佇む
たづね來人をしのびて待ちたてる夕べの空にのぼる月かげ
立待ちにうみて是非なく家に入ればにく々東の峯に月さす
のぼる月たちまたる間の長くしてあきはてしまゝ閑の戸をさす

たそがるゝ松の木かげに君とたちやすらふ間なく昇る月影
月は露匂へる菘に宿かりて虫の音さえたり神苑の秋
有明の月のかゞみをぼかしつゝ露たちのぼる花明山の空
歌人にたちまたるゝと白雲の幕おしあけて昇る月かげ
小夜ふけて山路たどれば月かげの清きがまゝに暫したちやすらふ
君まちて佇む軒に東の峯かきわけて昇る月かげ
小山田に向ひてたてる人ありと月にすかせばかゞしなりけり
いま月の昇るときよて蚊帳をはね小庭に出でゝながめけるかも
小庭に待つ程もなく東の山の尾上に月は昇れり

君今宵こんとばかりは思ほへす一人月かけ待ちわびてゐし
君をまつ夜はふくるよりも吾がかげを照らして昇る月ぞうらめし
高殿にゐながら向ふ宵やみを開いて昇る月のさやけさ
闇にたゞ一人みまちである窓を君は來まさず月ののぞけり
窓あけて二人みまつにのぼる月をおそくもあれと祈りけるかな
闇わけてかゞやく月を眺めんとならびみまちて夜をふかしけり
ゆで豆に茶をすゝりつゝ里人が共にみまちて月を拜がむ
歌人の共によりゐて待つ月のかけみるむしろのふけにけるかも
はしゐして君まちはれば吾がおもてにくや照らして月は昇れり

草枕旅の芝るに夜はふけて佇む窓に月は昇れり
故郷の心のあての峯清く照らして夜ふけの月は昇れり
小夜ふけて昇れる月の山の端に入らぬさきにも早明けにけり
となり人いより集ひて四方山の話にふくる臥待月かな
わが背子とふしまつ空にほんのりと雲をかぶりて夜半の月てる
待ちわびてさむしろの上によこたはりふしながら見る夜半の月かな
高殿に起き臥してまつ月かげのかどやく夜ふけは人聲静けし
さし昇る秋の長夜の月おそみひざの枕によりふしてまつ
いま月は昇れりとあらく子等の聲寝ながら吾はきゝゐたりけり

今宵昇る月のおそきを思ひやり宵の暫しを寐と寝てまつ
萩の家の主淋しく一人居を寝ながらやまつ夜半の月かげ
まつ月の出づるおそしとさむしろをはなれて二人間をさまよふ
山出づる月のおそさに吾が背子は心みちかくいねましにけり
夜半の月まつ間の宵を吾背子と枕さだめず庭におりたつ
小夜ふけて東に昇る弓はりのはつかなるかげ歌に見しかな
はつかなるかげ細々と地に落し小夜の中山のぼる秋月
虫の聲共に細れる夜の月ははつかに見ゆるかげなりしなり
月まちはつかばかりに見るかげを君に逢はまく樂しみしかな

月まぢの今宵はつかになりにつり君 逢ふ瀬の樂もしきかな
更けてゆく山のはつかに照る月のかげを葉に君や来まさむ
風清み虫はさえつゝ、吳竹のはつかに夜半の月は昇れり
小夜ふけて虫の音さゆる露草のはつかに昇る月も清けし
有明の月の入り方静ゆけば神苑の萩に露匂ふなり
あけ方の尾上の月をぼかしつゝ、辨たちのぼる天恩の郷
あけ方の空に残れる月光の露踏みしめて田入行くなり
あかつきの月の光にたふふべき曲の歌は消えんとぞする
曉の月夜の空とも知らずしてふざけて歸る柳の門かな

夕闇の間に逢はん此頃は有明月夜面しるければ
有明の月をぼかしてうす暗く霧たちのぼる丹波路の空
悔ゆるとも今は及ばじ入の目もかく有明の月に照らされ
たまに逢ひし涙の名残り有明の月恨めしき忍びの道かな
たまに逢ふ夜半の名残りの惜しまるゝこの曉は月も曇れり
秋の夜の曉かけて光る月を仰ぐよしなき丹波路の空
有明の月光白むきぬくを鳴き渡りゆく雁かりねの聲
有明の月光のこる神苑に清しくひやく神言の聲
あかつきの鳥より後にかすかなる光をなげて山出づる月

月の光空にうすれてくだかけの聲かしましく曉告ぐる
秋深みまだ夜をのこす月光にあやまりてなく森の鶴
ほのくくと白みゆく空を有明の月のおもての恨みがほなる
東山ほがらくと明け初めてかけうすれゆく有明の月
明け近くほのくく白む大空に名残り惜しげにかゝる残月
山の尾にほのくく明ける大空を惜しみがほなる有明の月
明け方に出る月光を天津目ののぼると見しか鶴早やなく
秋の夜の明けるも知らず月に懸ひてかへらん野路に東雲しのめでけり
秋の夜の明けるそなたにほつかりと光かひのあせたる月はかゝれり

大空に残りて明ける月見れば秋は淋しも一人居る身は
中空に明ける月とは知らずしてたはれて歸る門に面はゆ
月光の傾くまゝに神苑の萩の玉露かた光るなり
更けて行く夜をもあかで出づる月の露にぬらせる單衣の袖かな
このあした尾上に残る月光を慕ふが如く鳥西行く
半國の峯までかゝる有明の月をし見れば夜は明けにけり
山の端に傾く月の白々とかけうすれつゝ東雲にけり
半國の山の端近く薄れゆく月に思を家か鶴鳥けりのなく
待ち出づる月のみかげのおそければ秋の夜情しくも窓閉ぢて寝し

忙しき身は東の間も待ち惜しむ御庭に月を松虫のなく
小夜ふけて山の尾上をさしのぼる弓張月のあかすもあるかな
出で、待つほごなくのぼる片割れの月をしみればなき妻惚ばゆ
月一つ空に残して神苑は祝詞の聲に明け渡りけり

○

群明の館に到り中野氏の拜讀爲せる物語きく
月の歌三十五首を萩の家に休らひながら詠み上げにけり
夜の九時月光寮を訪れて一枚漫畫描きて歸りぬ

九月二十日

於高天閣

明光殿起き出で見れば醫王山白雲立ちて雨もよひあり
明光殿橋の工事に献勞者今日も八名セメント使へり
かたの如修業終りて武郷氏は義姉を伴ひ歸東せしかな
久し振薄田豪傑訪ひ來り光照殿にて面談を爲す
神佛畫描かんこ月光寮に入り夕暮る、前神苑に歸る
三重地方宣傳の旅無事終へて宇城宣使は復命なせり

蒸し暑く雨強くして萩の枝神苑にしだれ見る目痛まし
 雨強く風又強く吹き敷きて夜半の高天閣は賑はし
 雨しきり降る神苑を潜りつゝ明光殿に小夜更けて行く

作歌月の部(つゞき)

虫の音もさえつゝ深き夜の影を地上にさす月かすかなるかな
 大空にかたぶく月のかげ白み東雲の空あけはなれけり
 月ふくるみそらかすめて雁の聲さぶみつゝゆき渡るかな
 月のかげふくるとみれば吾が庭に一番鶉の鳴き渡るなり

わたる月の西になるかげ惜しむにやみそのゝ松虫ひた啼きになく
 小夜ふけて東に出づる月光のてりまさるかな木枯の空
 夜をふかの神苑の松におく露の光り照りそふ山昇る月
 夜をふかみ山の端出づる月かげに光りさえゆく萩におく露
 草の露てらして昇る月かげに秋の夜深くふけ渡るかな
 ゆく秋の長き夜あかぬも虫の聲みそらに月の昇ればなりけり
 長秋の夜くだつ空をあかしつゝ上弦の月昇りそめたり
 ふけ渡る萩生の露を照らしつゝ夜ごもりの月昇りそめたり
 虫の音に夜のふけゆけば草の露照らして昇る上弦の月

ふかき夜のかげをあかして東の山の尾の上に月は昇れり
虫の音にふけぬこの夜は淋しけれ今昇る月雲のつゝめば
ゆく野路のふくれどいとゞ樂しけれみそらに月の昇るおもへば
ゆく秋のふけてぞいとゞ樂しきは尾上に出づる夜半の月かげ
虫の音にふけゆく空をかゞやかし草より出づる武蔵野の月
ねざめして虫の音さゆる吾が窓をのぞけばさしぬ夜半の月かげ
東の山の尾上にあかねさし月はかなくも光あせゆく
月かげのさゆる間あらず齒さす東の空のをしとおもふも
月西にかたぶくをしき明け方を露の生命と松虫のなく

小夜ふけてあかずも惜しき月かげのあすると見れば夜明け間近し
小夜ふけて出づる月かげ七重八重雲のつゝみて歌人をしむ
上弦の月の光の消ければとゞめまほしきは東雲なりけり
とゞめなんすべもなきかなさえ渡る月をぼかして昇る陽のかげ
淺霧に入りなんとする月追ひてほのく昇る朝日かげかな
山の端に入るさに近き月かげを朝ぎりたちて包みけるかな
西になるかぎを落して東の峯の尾昇る上弦の月
西になるかげうすれつゝ月は今霧のとばりに包まれにけり
月西の山の端近くらすづきて東雲あさく家か鶯けなき渡る

ながむれば心淋しもゆく秋の小夜ふけ方の月のあすれば
 有明の空にあせゆく月をしみ萩も涙の露をこぼせり
 かぎりなく口惜しきものは有明の空にあせゆく月のかげかな
 秋の夜の長きみそらも限りあればあかつきさりて月も消えゆく
 大君の御代なが月の空にてる月の姿の若くもあるかな
 大空に雲ぎれさへも長月のかげはろくと月は昇れり
 長月の空昇りゆく十あまり三つ夜の月のみづくしきかな
 吹く風に雲片さへも長月の今宵の月の晴れやかなるかな
 十二夜の後の今宵の月かげは虫のかげさへ見え渡るなり

今宵はも十夜にあまりて三夜の月まろからねどもさやかなるかな
 十日あまり三夜の月とは仰げども月のめぐりかかげのまるきも
 大空の雲は嵐にはらはれてふたゝびすめる十三夜の月こらみ

○ 作 歌 秋 の 部

秋されば稲田の面に吹く風もとみに涼しく細々虫啼く
 そよ風に秋ぞとや知る夕暮の空深々と肌の涼しも
 秋と云へば涼しと思ふ吾が期待裏切る蟬の聲あつきかな
 立つ秋のしるしと庭の植込みに背松虫の啼き初む夕暮
 立つ秋の日かげは早し山の端に釣瓶おろしに暮れて行くかな

四方山に立つ秋の色見え初めてこの天地の静かなるかも
秋寒み虫の聲さへ細り行きて稻は田の面に傾きにけり
秋の霜踏みわけて行く野の路に飛びも取へざる蝶の群れ居り
秋の露梢に浴びて白萩の花は小徑にこぼれ匂へる
晴れつゝも秋の時雨の空曇るあとより又も襲ふ寒風
秋の風身にしむ頃となりにけり夜半に彼方此方砧の聞ゆる
秋の空晴れつ曇りつ吹く風の荒びの儘に任す夜半かな

○ 作 歌 戀 の 部

背の君に寝くたれ美を見せまじと夢に縋ふ朝未明かな

たまの緒の命の露の夜を深み君の情けに濡れし袖かな
戀しさの餘る逢ふ夜の深情あせざれとこそなやみてしかな
逢坂山人目の關の高ければ君と近江の夜こそ稀なる
逢ひ見んと夕べの關の戀深み月出でぬ間をさまよひて見し
春たちて初草もゆる山の家の中にも乙女の戀はもえつゝ
如月の初花ぞめの梅ヶ香にあこがれ月の夜にたつ乙女子
むつごとくも春の夕べに口ごもるはじめて逢ひし初戀の身は
逢ひそめし顔にもみぢのちりはえてくれゆく夜半に初しぐれする
ほんのりとおもて赤らむもみぢ葉の上枝に初山色ぞみえける

秋たちて夕べの風の強ければ戀山ぶみのもろく散りけり
彌生ぞら風にもろくも櫻花のみだれそむるが如し初戀
かた原の心のもつれわけそむる春の夕べに散るやあだ花
いや深き心の海をゆく舟になみかけそむる初春の風
白梅の今やかをと君がりに知らせそむるぞはづかしきかな
春雨の露かけそむる庭の花おもはゆげにもうつぶし匂ふ
天津日の山の端近く入りそむる夕べ戀しき梅の初花
ふみそむる花のステーション何となくおちけのつきてふるはるゝかな
思ひそむる人に逢ふ夜ははづかしく又うれしさにふるふ初戀

吾がおもひ露白梅の花の香は風のまに／＼散りゆきにけり
おもひたつ心の征矢^{そや}の今日も赤的をはづれし夜嵐の空
あてやかな花の姿をおもふより春の短夜あけがたきかな
何おもふともなくおもふ春の夜のおもひは思はぬ方にそれゆく
村肝の心をかくる君の目に射られて言葉も夏の夕ぐれ
かつかつに戀の山口わけゆけば憎くや嵐の花を散らせり
おもひそめし戀のみちしばわけゆけば尾花のそよぎものをのゝく初たび
ふみなれぬ戀の春野をわけゆけばおぼろの月は空にかゝれり
人知らぬ戀路に胸を焦しつゝ眼かすみてくらむ月かげ

花心春の大野をいわけなく虫にも似たる吾が戀路かな
おもふこと半ばも云はで夜半に泣くうひ／＼しくも乙女の戀かな
うちつけに夕べの空の月かけの涙にくもる初春の戀
うち出づる言の葉さへもよどみつゝなやみにくるゝ初おもひかな
今よりはおもひ切らんと思ひつゝ春の夕べはなほ思ふかな
人の日の關をおそれて今日よりはゆかじとおもふ初戀の路
日にそひて梅の初花ふくらみぬたが手折らん夜半の一枝を
おほらかに思ひのたけをほめかす乙女の戀のあどけなきかな
いかでかは通さゞらめや初戀の道の關路はよし高くとも

ふみ迷ふ心の糸の亂れをばとかんよしなき初おもひかな
迷ふべき戀路と知れどゆきてみむ心の駒のはやる限りを
人戀ふる身のいさやまたなけれども櫻の一枝手折りたきかな
まだ知らぬ人を戀ひつゝ山の端に昇る月かけ仰ぎてしかな
彌生空月の光のあらざるは花さく夕べの恨みなりけり
夜にほふ花とは知らで霜のおく夕べ淋しくいねしをしさよ
行く末の身を考ふるひまさへもなしの花咲く夕べ戀しき
今よりの涙のはてとなりぬらん手折らんとせし花の散るれば
その君をおもふ夕べの涙こそたがならはしの露にやあるらん

乙女子はいつの日たれにならへるか人を見れば顔赤らむる
忍びつゝかく玉章の筆の手もふるひをのゝく初おもひかな
十六の春を迎へておぼろ氣に戀てふ事をさとりけるかな
春の野の花にたはむる蝶々の羽かぜに匂ふ戀心かな
戀ひわぶる心の色の深ければもみぢの秋もかなしかりけり
その君を戀をし戀はゞ夢に入りてあかつきの鐘をしまるゝかな
戀ひ死なん心のほども白雪のつめたき君のうらめしきかな
戀ひ死なんばかりに思ふ吾が心涙まさぬ君のひやゝかなるかな
君を戀ひ瘠せるともよし死すもよし一枝の花の露をたまへば

汝が君を戀ひつゝぞふる春の夜の花なる吾をあだに捨てざれ
小夜ふけて戀草の花手折る手に月のなさけの露は宿れり
苦しさに戀忘れ草からんぞとおもへば尙も戀ひまさるかな
若き日の血しほもえたつ春の宵戀のやつことなりて狂へり
人はいさ戀の奴とはかゆとも花ばかりかも春の主は
胸に火のもえたつ戀の焰をば消さんすべなき若き日の春
おもふ人は吾が面さへも知らねども心いよ／＼片戀となる

九月二十一日

於 明 光 殿

朝の雨降り止まずして明光の文殿暗く蚊の音淋しも
 醫王山白雲深く立ちこめて秋の花明山雨烟るなり
 日々並めて降る秋雨の露重み亂れ伏しけり神苑の萩村
 昨日今日吾眼のまはり赤しとぞさ、やき合へり明光天人
 寝不足の爲にやあらむ吾まなこ充血なして眠たき朝かな
 朝の湯に心おだいに浸りつ、髭を落して業平となる

今朝も亦尻なり平の音高く水玉の浮く風呂の中かな
 吾一人入る湯なりせば誰が爲に心引かれむ業尻の音を
 東京の米倉範治氏訪ひ來り午後五時發にて歸途に就きたり
 宇知麿は井上總裁もろともに支那客迎へて神戸に立ち行く
 明月氏崎月と共に夕刻の汽車にて神戸に出張を爲す
 公園氏來りていとも珍らしき蒔繪の菓子箱贈り來れり
 和歌冠句巻十二冊短冊と色紙併せて三百枚かく
 終日の雨たそがれに霽れ渡り俄に神苑すがしくなりけり

○作歌 戀の部 (つゞき)

小夜ふけて吾はも夏のしげきもる月に涙を照らしけるかな
たらちねの親のゆるしはなれどもやがていやすん戀のやまひを
戀の紐とくよしもなし君こそは引く手あまたの花のみすがた
月か雪か君のよそはひ野の萩かみれどもあかぬやさ姿かな
燃えたちて色香ますく深見草靜かにしをる牡丹花の露
たまきはる戀のみだれを解くよしも長月の夜の楯形の月
戀の山なくば人目の關安くわたらんものと月をねたみし
逢坂の戀の關守小夜更けてひそかにく君と渡らむ

百千花匂へる神苑に吾たてばみどり紅くれなゐもる戀の湧く
まゝならぬ戀とは知れど逢坂の關の關路を越えんとぞ思ふ
わが戀はいはでの森の時鳥かげに潜みてしのび音に鳴く
かりそめの夢にも戀ふる人のかげわが日はなれぬ初おもひかな
小夜更けてこゝら戀しき人待てば風の音にもあこがれのわく
たそがれて妹戀しきに獨り居の窓にきて啼く虫ぞ憎らし
雪深み妹がりゆけば冬の夜の川風寒く身に泌み渡る
君こそは吾をふるせる初戀の昔の春の女神なりしよ
ゆくりなく思はぬ人に思はれて思ひかへさんよしなき夜半かな

われ戀ふる人憎からぬ思へども妹のある身は如何にとやせん
月清み人めもるよの苦しさに老木の森のかけぞたのまる
潜水くみりづのひそく通ふわが思ひ人知るらめや君とありとも
二人のみ只二人のみひそやかに人目のひまを潜りし夜半かな
只二人人なきとこにやすらへば窓の月かけ空に微笑む
わが戀ふる人の手枕さやくに黒髪匂ふ夜半の涼風
ひそやかに戀ふる心は獨り寝の枕もしらぬ思ひなりけり
君戀ひて獨り寝る夜の高殿に夜半の嵐の窓叩きゆく
君戀ふる心の開はいくばえにかさなり合ひて晴るゝ夜ぞなき

二人寝る夜半の踏音もらさじと閨の戸堅く閉ざしみしかな
人の世の戀てふ世々のかねごとを知る年頃の初思ひかな
懸鼓打ち出でかねて人知れず夜を泣き明す初おもひかな
あこがるゝ魂にやあらむ君が住む軒に夜なく燃ゆる光は
まだ知らぬ心づかひを覚えけり君と相見し花の夕べに
君戀ひて心一つに歎く夜の空鳴き渡る雁かりがねの聲
君戀ふる心のしるべと賜りし君の指輪に宿る佛
君戀ふる心の奥山わけ入れば秋ぞ悲しき小男鹿の聲
わが思ふ底の心を白波の上に載たはるゝ夜半の海風

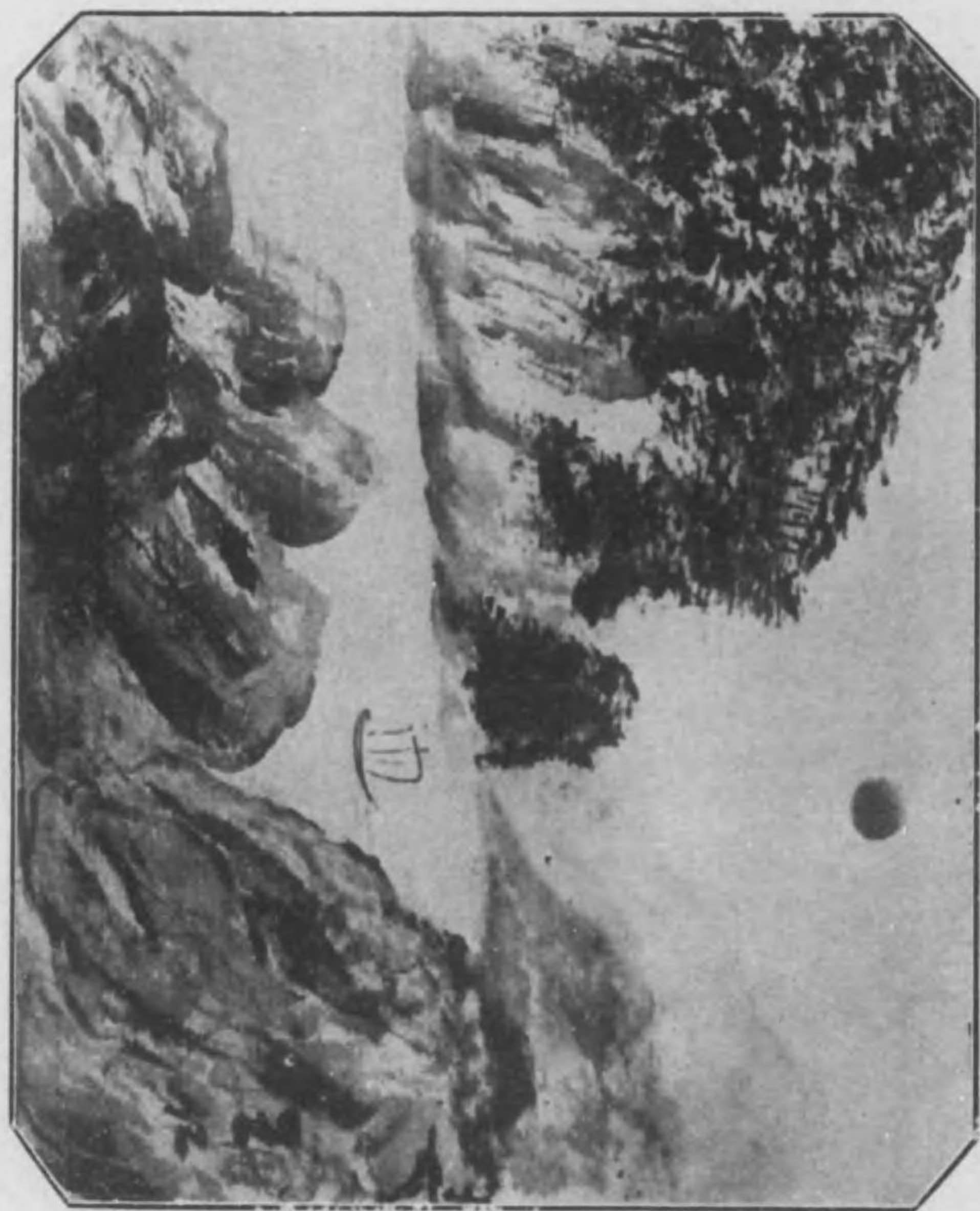
日を重ね月を重ねて君が偽まごふ心は戀の闇かも
仇し心なしとや君はのたまへど花の夕べは心さわぐも
花匂ふ機の下の心こそ君のさそひし初思ひかな
そらになる心の花の露しげみ月も宿れる春の夜半かな
物おもふとにはあちねど春の夜は花なる君の姿目に浮く
明光殿匂へる花のすがしさに吾が足重き高天閣かな
雨機閉ざして暗き神苑も吾には明き明光殿かな
栗の穂梢にわるゝ状見れば南瓜美人の口に似しかな
いそがしき身もものを言ふ花の笑みに時を忘るゝ汗ぞ怪しき

秋の夜の月澄み渡る中空に物おもふかな妹の孕めば
君とあれば物おもふてふ事なき身にも旅にしあれば月ぞ戀しき
わがおもふ思ひのたけを中空の月にかこちて寝る夜淋しき
身にあまる思ひは御空高く照る月に手をさす猿ましろに似しかな
秋の夜の獨り寝淋しく打ちわぶるわが窓の邊に月は傾く
盈ち虧げのある月の夜に花に風の仇しちぎりを結びてしかな
あくるまでの露の契と思へども萬代までもと言問ひけるかな
西山の末もとほらぬ有明のうするゝ月の戀もするかな
このまゝにありはつまじき身にしあれば月みつる夜は又も逢はなん

大空の月のさやけさ遠ふよしも涙にくるゝ戀の闇かな
君見まくほしき夕べは望の夜の月のかげさへうとまるゝかな
とりとめぬ話に夜は更けゆきて峯の尾上に月は昇れり
あはれとも思へ果敢なきわが戀はあしたの空に穢する月かげ
その君と暮せる中の年月をまぼろしの如照らす月かげ
三日月の夜なく光りなれまさる戀もするかな望月の君
物の色見えぬ夕べの闇わけて待たるゝ月の昇りけるかな
わりなくも君と相見し夕暮は月のかげにもはぢらひけるかな
月かげをわりなく包む黒雲の空おそろじき戀もするかな

いひ知らぬ思ひにみつるこの夕べ君の佛月に浮かべる
假初かりそめのいたづらぶしの我が窓を心なき月のぞく夜半かな
いつしかと待ちわびし君に逢坂の峯を照らして月冴ゆる夜半
月かげにちかひし事の口惜しけれ變るならひのある世思へば
なりはひをよその月日のある世かな露も木の葉の下をくゞれば
照る月の面をかすむる雁聞きぬはるけき君の文使ひとも
つれなくもかへる玉章惜らしく月の流るゝ水に捨てけり
月かゝる萩虫の露をわけて來し君にやあらん袖のうつり香
人知れず忍ヶ岡の月戀ふるわれは松虫夜なくに啼く

わが思ひ戀ふる人にも知られじないきつきかげの下にかくるゝ
黄昏の色見えぬ夜を松のかげ月は戀路のさまたげなりせば
秘め事は露ばかり程も洩らさじなと誓ふ夕べに月の露洩る
相見んと軒の忍のさゆれにも思ひを砕くたそがれの空
住き人の忍び來し夜の朝明けに軒端の草は亂れてありけり
君戀ひてつゝむ涙のひる間さへ泣く／＼今日も暮れにけるかな
潜水くさりづの聞ひそくと君に逢ひし花の姿を人知るらめや
つゝみはつべくもあらねば打ちつけに君戀ひ渡るとなる夕暮
幾年かしのぶの露の重なりて川となりけり淵となりけり



山口聖高筆の山水

文殿に日頃親しく交れど君はくまさぬ下の思ひを
口さかのなき女等の中なれば心許さじ秘めし戀路を
月も知り人もこそ知れ小夜更けて君と相見し夜半の一幕
忍ぶとも猶こそつゝめ君とわれ契りあひたる夢の一節
君戀ひて一人待つ夜は長月の露吹き拂ふ袖のしがらみ
かつ／＼に人目づゝみをのり越えし昔の夢の目に躍るかな
何時の日か心の中の思ひ草刈らん術なく面やつれけり
その君の情の露をもらさじな心づかひにやつるゝわが面
たそがれの人目の露を思ふ身のいたましげなる戀もするかな

君しのぶ心の奥の深ければ明かす術なみ夜を泣き渡る
みごもりの苜にも似たるわが戀は夜半の嵐にをののき渡る
みがくれし草葉の露も惜しまるゝ逢ひし夕べの涙と思へば
君戀ふる心の奥をいはでのみ幾夜經にけむ戀のかけ橋
戀ひ渡る心の駒を止めつゝ色に出さじと忍び音に泣く
吾が戀は深山の奥のほとゝぎす人に知らさず忍び音に鳴く
吾が思ふ下の心を明け方の空はづかしく憫みてしかな
戀ひ渡る心の底ひ深きまゝに泣む人もなく知る人も無し
おぼろ夜の春野を行けば思ひ草つゝむ袂に露のしたゝる

いひよれど君はこたへす口なしの下染衣着んよしもなし
外に誰も知る人なしと思ひしを風にひろぐる花心かな
村肝の心一つに戀ひわたる君の軒端に夜を更かしけり
陸奥むつのしのぶもちざり知らねども君が玉章たのまるゝかな
わが戀は岩間がくれの水なれや泣む人もなく知る人もなし
咲く花の下に亂るゝ春駒にまがふべらなるわが戀路かな
燃えさかる心もいはで物おもふ秋の夕べの戀ぞ苦しき
燃えさかる胸の苦しき白露の君こそあしたの恨みなりけり
秋の夜の海の底ひにさす月か只君のみをひたにこがるゝ

小夜更けて降りしく露の忍び草ふる、袂の香に匂ふかな
こはんにくにおさふる袖をふり放ちどんと打ち出す眩鐵砲かな
末つひに海とやならん水蓮の筆の雫のたまりく、て
誰故に夜なく山路通ふらんと君のみぞたよりなりけり
深窓に一人こもりのみながらも春の彌生は心色めく
年ふれば色や褪せなんもみち葉の梢も風に痛む惜しきよ
君戀ひて年経にけれど如何にせん高嶺の花は手折る術なみ
いつまでか戀ひ渡るべき思ひぞと思へば秋は淋しかりけり
いつよりか思ひふりにし花の君は孔雀となりて飛び去りにけり

年月の移るがまゝに變りゆく花の色香の惜しまるゝかな
送ぐるまでよをつくさんと思ひ草露の情を掬はんとして
久しくも戀ひ渡りたるその君は夜半の嵐の花と散りぬる
幾年か経りぬるあとの君見れば昔の春の偲ばるゝかな
わが思ひ積る月日の駒早く三年四年を夢と過ぎけり
果敢なけれ高嶺の花におく露の風に知られぬ中の生命は
あたらしき花に移らふ君ならば心ふるすと吾をやみまさむ
わが思ひ忍ばれぬべきものならばむしろ水底みぞのもくづとならん
何時の日かあらはれぬべき戀ならばうちあけて見む燃ゆる思ひを

童わらわの性さがなき口に何時の日か洩れもやせんと忍ぶ戀かな
殊更に涙ぞしるき今宵かな君松ヶ枝に小夜嵐吹く
夜な〜に堪へぬ思の重なりて君のおもひまほろし儚はろし幻まほろしに見る
戀ふる日にたへぬ景色はもみぢ葉の色づく夕べの姿なりけり
思ふにも今はあまりぬうたかた水泡うたかたの夢とあきらむよしもなきまで
わが戀の叶ひし夜半の嬉しきに鏡と問はず語りするかも
わが戀は年を經りにし水桶かつひには洩らす時や來たらん
その君を思ふのあまり深ければ心弱くも言ひ出でかねつゝ
よしやよし戀は死ぬとも吾が墓ふ心の花を匂はせたきかな

あこがれて身をば捨つとも惜しからじ君の榮えの目出度かりせば
胸の火は夜な〜消えぬ只戀ふる君のやさしき涕うかびて
苦しさに只忍ぶるに堪へずなる秋の夕べは悲しかりけり
身にかへてこそ思ふかなその君は手折れぬ高嶺の花にあれども
世の常のならばしの外の戀の道歩まぬ者は木石なるらむ
只君の爲にながらふ玉の緒よ絶えねば花も梢にとまらじ
夜深みともし火消えて物思ふ窓邊に近き松虫のこゑ
玉の緒も消ゆばかりなるこの思ひ活かすは情の露ばかりなる
戀ひ死なむ思ひは日々に深見草の露吹き拂ふ青嵐かな

いはで思ふ心の戀の果敢なさは埒定めぬ雌鳥なるかも

○

身も魂も睦み合つてゐる神の國
もちきれぬ世をたて直すみろく神
假名手本書き了ふせたとうがらし
追ひ行きて悟られてゐる夏の月
つるくくと釣瓶落しに暮るゝ秋
叱られて杓子に尻持つ山の神
樂ぢやない是はやつぱり有田焼
人らぬく神の道にはえこひいき

おいそれと火事に飛出すあわてもの
おいそれと南瓜も早×速食はせない
洗ひかへ世を清めんと音頭とり
うつとりと踏み外してゐる戀の橋
入らぬく不景氣風に空財布
うつとりとしてあきれてる花の山

○

初秋の風立ち初めてきれくくに青松虫の啼き出でにけり
雨しげき夕の神苑暗くして只虫の聲のみぞ流るる

◇九日二十一日 丹波毎日新聞所載記事

佐上知事初來丹

町村長 め

緊縮の購演行脚

郡是や大本も視て奥丹へ

廿五日午前九時綾部町波多野記念館で丹波五郡町村長八十六名會合、佐上知事から緊縮及び實行豫算の講演あり、終つて知事は郡是、大本等を視察、夕刻宮津へ向ふ。

九月二十二日

於 明 光 殿

心地良くあしたの空は晴れ渡り風吹き荒ぶ花明山高臺
きここなく疲れて全身だるみつ、正午頃まで寢床にありけり
北夕社吉野花明氏と久し振り明光殿にて懇談を爲す
伊都能賣の神像二幅表具終り高天閣と明光殿に懸く
國祖神大畫幅一本深見氏に托して聖地に送りけるかな
風あれき大空高く蒼くして日光も清く神苑晴れたり

吉川村佐藤儀平氏夫人以下家族一同参館して行く
 主事室に少時休らひ山水畫二枚小軸に筆染めにけり
 氣持ち良き今日の日和に萩見んと夕方神苑めぐり見しかな
 虫の音は瀑布の如く神苑に流れて日光いや牙え波れり
 萩の花こほる、庭を我れ行けば夕べの風に袖かをるなり
 紅出字會一行神戸に安着と宇知庵電信打ちて來れり
 群明館留守宅に入り戀の歌百三十三詠み夜を更かしけり

八月二十二日

分門 六 登

○ 作歌 戀の部 (つゞき)

戀すとは云はじたいく君のます庵の窓を行き交ふ久しき
 人を戀うと言ふ柄になき吾身ぞと言はで亂るゝ胸の内かな
 すがくと打ち出でがたき吾戀は積りくで病となりぬる
 夜は燃え盡ば亂るゝ吾魂の果敢なき戀を知る人もなし
 君戀うと言はねばえこそ苦しけれ花は咲くとも紅葉照るとも
 胸に火の燃ゆる思ひを人知るやいかに苦しき戀もこそすれ
 細くとも露にうかるゝ澤の邊のよるの螢の戀ぞ恨めし
 日に月に思ひ重ねてむすばるゝ心の糸のくるしき戀かな

親しかる友にも思ひを漏しかね一人涙の袖押るかな
秋の夜の空行く雁に歎ちけり語る人なき忍ぶ思ひを
かくとだに戀は苦しきものぞとは知らずありけり花の春まで
人知れず谷間に匂ふ山吹の口なし草の戀にやつるゝ
あし引の山吹の花の色深く水鏡見る吾れとなりぬる
年月を思ひやつれてしのすゝき穂に出て人の目に留りつゝ
戀すとは岩田の森のほとゝぎすたゞ忍び音に鳴く斗りなる
心弱く思ひのたけを岩しろの松に照り添ふ月になげきつ
朝な夕な君の上のみ思へども夕べの空の口なしの吾れ

思うとは口にも色にもあらはさぬ忍べる戀にやつれし吾れかな
ひたすらに君思うとて如何にせん渡らむ橋の一つ無き身は
戀ふるとは吾れあらはさぬ思ひしに早くも浮名の立つぞ情なき
戀ひ渡る心の奥を知られじと思へど何時か色に出にけり
如何にして思ひのたけをその君に傳へんものと忍ぶ朝夕
ともすれば燃ゆる心を押し込めて知らさぬ色の穂に出づるかな
玉の井の深き思ひを汲む人のなき夕暮はひたに戀しき
戀の淵深き心もしらなみの立ちさわぐこそ身失せ度きかも
戀ひ渡る心はたゞにうけひかじ忍ぶ思ひの仇となるとも

何故に斯くも悲しきものなるかひそかに人を戀ふる夕べは
如何でとは知らず人戀ふ夕暮は虫の啼く音も吾れには悲しき
今宵こそ心のたけを知らせまじ忍ぶ思ひの果てしなれば
忍びく久しく經にし吾思ひ知らせやせなん叶はじとても
かくとだに思ひ重ねし苦しみを渡むや渡ますや打ち明けて見む
それとしも知らぬ振りにて人事によそへて明かす忍ぶの戀かな
見染川流れの水の一掬汲みてや君にもらさばやと思ふ
よしやよし男の子の顔はすたる共打ちあけて見んおもふ心を
戀ふるとは岩田の森のかげたちて思ひをかくる人に知らせむ

忍び音に泣きつゝ戀ふる吾思ひ生命をかけて告げやらむかも
いとせめて夢うつゝにも戀ふる君の玉手に思ひを告げんとぞ思ふ
今はたゞ忍ぶべきかは徒らに月日の駒に關守なければ
朝夕に燃ゆる思ひのつらければさてしもやまじ打ち明けて見む
あぢきなく若やる年を過ごすべき花も春にはほひこそすれ
知らせ初むる心の色の深見草花は散るとも根こそ強けれ
沸きたつる熱き心をその君にもらし初むるよ黄昏深し
打ちつけに言ひ初むる途の日は長く花にかこつけ紅葉に誘ひて
打ちつけに言ひ出でかねて胸に火の燃ゆる思ひをほめかす夕

うちいづる言の葉さへも口籠るよわき心を語る夕暮
わが思ひ慕びあまりて堪へ難き夢心地にて明かす戀かな
穂薄のゆるゝ夕べや思ひかね思ひ亂るゝ魔風戀風
手折らんと思ひ始めし夕べより花に亂るゝわが心かな
手折るべき花ならね共色と香の清きに思ひあまりてぞ戀ふ
如何にせんつゝむにあまる白梅の清しき君に燃ゆる香戀
色も香も妙なる君の顔かんはせに忍びえぬまで戀ひわたるかな
戀ふる人の心にもらす術もがたと狂はしきまで心なやむも
金無くば如何に立派な男子でも娘はやらぬと親の欺獄

うちつけに心の丈を語りたる後こそ日々に戀まさるかな
わが戀は忍ヶ岡の花すゝき穂に出でゝより露まさりゆく
わざとなくいづる言の葉はづかしき思ひあまりて堪へ難きまゝ
不始歸などの小説よみ／＼てそれとはなしに知らせつるかも
今日こそはあゝ今日こそは今日こそはその今日こそはまた明日となる
われこそは心弱くやありにけむ打ち明けかねて今日となりけり
何しかも大業平の君さへも戀には弱く打ちあけかねつゝ
思ひきり打出の濱の夕風に吹かれさまさん駒の焔を
日々並べて君しのびえぬ思ひをば明石の濱の波立ちさわぐ

わが思ひ知らせじとこそ思ひ入るおもひ果敢なく破れけるかも
昔に聞く稻佐の濱の松風に吹かれて見ばや燃ゆる面を
人づてに菊の香りのその君を慕ふ長夜のわれぞ情なき
白梅の綻び初めし袖の香を風のたよりに聞くぞ戀しき
人傳に聞くともなしにわが胸に君のおもかけ去りやらぬかな
淋しさにまだ見ぬ人をあこがるゝ夕べ悲しく雁鳴き渡る
色も香も日出度き君と聞くからにわが玉の緒の花はみだるゝ
物越しにちらと見初めしその人のおもかけ消えぬ長月の夜半
物事のおはれを知れる君と聞きその名ばかりにあこがれにけり

世を救ひ人^{いづく}慕しむその君のまだ見ぬ佛慕はしき哉
君戀うと心よわさに言ひかねて折々よそに言葉そらしつ
かねて聞く人傳にてはあらね共逢はま欲しさにこがるゝ夕暮
わが思ひ口性^{かたが}のなき世にもりていよ／＼つよく戀ひまさりけり
人傳に聞くにゆかしきその君を慕ふ夕べや松虫の啼く
思ひわび燃ゆる胸の苦しきをよそにならへて打ちあかす宵
まだ知らぬ人の噂を床しみて聞きも過ごさで戀ひ渡るかも
まだ知らぬ人にしあれど戀ふる身は人傳に聞くことのみぞよき
まだ知らぬ君を朝夕戀ひ思ふあたりの人は如何にはかゆも

戀しきによそにならへて語りしはなほざりごとにあらずわが胸
その君を思ひやらるゝ窓の内にさす月かげの高くもあるかな
吹く風の音にきくなるその君をわれ白波の亂れ初めにき
たし／＼にたのむ使ひの復り言早くもあれと待つ夕べかな
わが胸を傳ふる人の文使ひ待つも久しきこの夕べかな
人傳の言の葉末に花咲かば匂ひこぼれんわが戀衣は
折よくば告げよといひて遣はせし人の歸りを待ち侘ぶるかな
人づてにいへども君は白雲のよそに眼を外す情なき
待つ人のたよりうれしき夕まぐれ心の花も笑みさかえつゝ

一日見し花の顔吾胸に去らなき佛ぶつとなるぞ苦しき
群芳のほかに見初めし優委生命までもと思ひけるかな
花のかげに見交すほどの艶姿その黒髪にこゝろとけ入る
吉野山花の盛りに見初めてゆ君は忘れぬかげとなりけり
黒髪のみづぎはまさりてつや／＼けき君のおもかけ偲ぶ夜半かな
ゆくりなく君見初めつる夕べより心の花は亂れそめたり
一目見し面影胸にうつろひて月日の歩み忘れけるかな
艶姿みてのみや吾れやすからじ胸に焔の燃えつゞく身は
一目見し日よりはなれぬ汝が姿黒白もわかず吾れはなりつる

一目見しまゝに此の世を過ぐるかと思へば悲しわが戀心
ひたすらに花なる君を戀ふる夜は夢にうつゝに面影を見む
わが思ひ花なる君に知らせばや月にも戀ふる虫のある世は
かつゝも君の姿を垣間見て此の世の憂をさとりそめけり
只一目ばかりに見たる君なれど忘れ難きは花のおもかげ
玉の聲菊の御園の花の色かつ見し程に戀ひまさるかも
よそながらふと見初めたる黒髪のをよぎにをのくわが心かな
みるめかる海士の少女の君なれや見初むる間なくかくれけるかな
道ゆけばふと遇ひ初めし町うちのみるめ間も無くかくるゝ君哉

春の日の夕べかつゝ見るまゝに追ひしきゆけば袖に花散る
なみたちてみしまがまれにもよき人と思へば胸に仇波のうつ
さてもあかぬみるめ清しき花姿誰が爲に咲く聞かまほしさよ
君こそは峯の白雲吾れは只そのゆく姿見るばかりなる
春の宵君見てしより村野の心おぼろにかすみけるかな
君こそは雲たつ夕べの月なれやわれ戀ひゆけば見えがくれする
白菊の花のよそほひ日がれせず露の瞳の君ぞゆかしも
はつかにも花の夕べに見てしより君戀ひ渡る身とはなりけり
ほのゝくと一目見しより思ふかな朝日に匂ふ白梅の君

わが戀は浪花の三津の芦なれや君を見初めて打ちふるふなり
目には見て居ながら君の玉の手にふるよしなき戀ぞ悲しき
香に匂ふ花の姿の君に逢ひてまゝならぬ世をかこつ春の夜
やさしがる妹のままひの忘れず朝な夕なに目に躍るかな
三日月の夕べ見初めし君こそは情の露を結ぶよしなし
玉だれの音にも心をのゝきて眼覺めけり君來ますやと
花誘ふ月の夕べにほの見てし君のおもかげ幻に浮く
世を開き道を治むる丈夫と見ぬ人ながら戀ふる吾れかな
おぼつかかなわが戀ひながら功績の秀でたる人忘れ難きも

世の人の稱への言葉高ければ目に見ぬながら戀ひ渡るかな
行末を思ひやりつゝまだ咲かぬ花の乙女を戀ひ渡るかな
照る月のかげをみぬ夜の手枕の夢路に通ふ戀ふ人の面
夢にだに見し事も無き麗人を花の夕べに言問ひけるかな
照る月の御空に戀ふる思ひかなわが魂の届くよしなき
只一日ほのかにだにも見ま欲しき朝な夕なにあこがれの君
夢にだに見ばこそあらめその君のまだ見ぬ姿戀ひしき秋の夜
わが生命はつかにだにも戀ひ渡る人の噂にこゝろみだるゝ

日向日記入の巻奥附

昭和五年一月廿五日發行
京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字東四ツ辻十三番地
天聲社
定價金壹圓貳拾錢

昭和五年一月廿五日發行

日向日記入の巻奥附
定價金壹圓貳拾錢

不許複製

編輯者 天聲社
京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字東四ツ辻十三番地

發行所 天聲社
京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字東四ツ辻十三番地

〔振替大阪六〇五三四番〕

終

